

反障害通信

22. 4. 18

118号

そもそも ファシズムとは何だろう？

はじめに

この「そもそも」シリーズを始めたのは何か深い思いがあったわけではなくて、何か怪しげなタイトルの『そろそろ左派は<経済>を語ろう』という本を読んだひとが、その本に共鳴したような文を書いていた（わたしの読書メモ 582、『反障害通信』116号所収）。何でこんな怪しげな本が出てくるのだろう、とその批判をする過程で、「そもそも、なぜ、きちんと問題をとらえ返す作業がなされないのだろう」という思いを抱いたのです。「そもそも」と「そろそろ」、語呂が似ているところで、いくつかのテーマを思いつくままに、連載を始めたのです。そうしている内に、わたしにしては分かりやすいテーマで、問題を掘り下げて書けるとの思いで続けています。そのうちに、体系的に論じていこうという思いも出てきているのですが、そうになると、論理的なわかりにくい文になりそうなので、とりあえず、感性的に思いつくままのテーマを選んで書いています。

さて、今回は「ファシズム」をとりあげました。今現在、ロシアのウクライナ侵攻がなされています。「そもそも」というところでは、大義なきという意味で意味不明の侵攻なのです。まず、これを「特別軍事作戦」と言って、「侵攻や侵略ではない」(註1)という主張はまさにごまかしです。軍隊を他国の許可なしに他国に移動させればそれはまさに侵攻です。しかも、相手国の軍隊との戦闘を行っていて、それを「侵攻ではない」というのは詭弁にすぎません。ウクライナ内のロシア人を守るとかとか言っていますが(註2)、これはアメリカが中米で行ってきた軍事侵攻の常套手段として使ってきた詭弁です。さらに、東部のロシア人の多い地域に限定して侵攻したとすれば、詭弁として批判することですが、首都や他の大都市にも侵攻したのですからデマそのものでしかありません。さらに「ロシアとウクライナは兄弟国であり、歴史的にも一体である」などとプーチンは言っているのですが、それで、民間人を含むウクライナ人を殺して、何が「兄弟国」なのでしょう？ ロシアは、防衛のための軍事行動と言っているのですが、ウクライナがロシアに侵攻しているということはありません。何を守ろうとしているのでしょうか？ これがこの戦争の核心なのですが、「強国ロシアの国家主義的威信」を守るということなのです。この国家主義はまさにファシズム的なさらにファシズムそのものの国家主義なのです。この戦争はアメリカが「大量破壊兵器をもって、世界の脅威になっている」というデマの下で行ったイラク戦争を彷彿させます。

さて、この戦争の中で、国内外で、ファシズムと連動するようないろんな動きが出ています。そもそもプーチン的なもの——ファシズム的なことと共鳴していた安倍元首相の「核共有化論」や山東昭子参議院議長の「ウクライナ国民が命をかえりみず、祖国の為に戦っている姿を拝見して、その勇気に感動した」という国家主義的全体主義的な発言なども出

ています。ロシアの侵攻は、全否定されることですが、それを「ウクライナの全面支持」にしてしまうと、ナショナリズム的なことに巻き込まれ、世界的なファシズム的な動きにも飲み込まれてしまうのです。

さて、日本では安倍元首相とプーチンとの蜜月があったはずなのです。そもそもプーチン政権の体質を押さええていたら、そんな関係がなかったはずなのです。安倍元首相の「やっているふり政治」で、北方領土を巡る幻想をふりまいていたことが見事に破綻してしまったのです。岸田政権は、原発へのロシア軍の攻撃や占拠に対して、「唯一の戦争被爆国として、フクシマ原発事故を経験した国として許せない」とかいうおかしい話をしています。今回のプーチンの核使用をちらつかせかける様は「核抑止」ならず「核脅迫」という核兵器の持つ根源的意味を表しているのです。また「ロシアが滅びるなら世界が続いても意味がない」とまで言い切る状況では「核抑止論」は虚構であるといしか言い様がありません。「唯一の戦争被爆国」というならば、核の傘から（軍事同盟から）脱して、核兵器禁止条約の旗振り役を果たすことです。また、フクシマ事故の経験を語るならば、戦争の中で原発がどのような状態になるのか如実になってきているならば、すべての原発は即時廃炉の作業に入っていくことです。また日本では過去の戦争と植民地支配に関して歴史修正主義が跋扈しているのですが、ロシアのウクライナ侵攻におけるロシアのごまかしは、その歴史修正主義といかに似通っているのか、これも如実に現れてきているのです。

I ファシズムの内容規定

さて、肝腎のファシズム規定です。わたしはハナ・アーレントの学習過程で、ファシズムは次の内容を満たしていると押さええていました。①差別排外主義②民衆的イデオロギー運動と行動③拡張的・覇権的「汎」の突き出し（汎ゲルマン民族主義、汎スラブ主義、汎アジア主義、……）④階級を超えたナショナリズム（国家主義・民族主義）もしくは人種（差別）主義（アーリア人種の形成・発展……）⑤テロリズムと民衆を巻き込んだ秘密警察的組織による恐怖支配⑥デマゴギーや報道規制・抑圧による情報操作。

ドイツ・ナチズムというファシズムの典型例と対比させて、他の形態のファシズムも考慮に入れて、これをもう少し修正・整理してみます。

次のIIで度数（指数）表示を試論的におこなっているのですが、(1)～(5)の項目（モーメント（註3））とイロハで表示した下位分類をあげました。これらは、更に内容的にひとつひとつの項目ごとに度数（指数）を押さえる作業も必要になります。（註4）

具体的項目をあげてみます。わたしの試論です。読者各位がこの試論への批判のなかで、いろいろ項目をあげ独自に整理してもらえればとも思っています。

(1) ナショナリズム（国家主義&民族主義）

nation には、国家と民族という意味があり、国民国家という概念でまとめられるのですが、このナショナリズムがファシズム的なことの大きなモーメントになっています。これまでの過去の歴史において、ナショナリズムによっていとも簡単に統合されていき戦争遂行の体制が作られていく歴史をとらえると、このナショナリズムということに如何に対峙していくのが肝要になります。また、ファシズムの反対語の一つは、民主主義ですが、民主主義の反対語のひとつは、国家主義ではないかとわたしは押さええています。

実はアーレントは、ナチスは国家主義や民族主義がないというような押さえ方をしてい

るのですが、わたしはナチスの第三帝国は現象的には国家という枠組みを超えた、しかし、国家主義の延長線上の超国家主義ですし、またドイツ民族という継ぎ足しをしなかったとしても、むしろアーリア人種の世界として、民族の中身としての人種の突き出しという超民族主義ではないかなどと考えていました。

(2) 圧政政治（強権政治）

イ 情報統制・情報操作

ファシズムが隆起してくるとき、情報を巡る攻防が一つの焦点になります。統制ということは、むしろそれ以前の付度政治のようなことも生み出します。歴史修正主義などもこの一つとしてあります。また、ファシズムにはうそ・ごまかし・ペテンを常套手段にしています。「うそつきはファシズムの始まり」という標語も出てきます。情報隠蔽や歪曲というだけでなく、やっつけ主義によるマスコミへの抑制ということで進んで行く事態もおさえておく必要があります

ロ 情報機関の暗躍とテロリズム

これはファシズムの成立過程でのテロリズムや、その完成形としての情報機関が暗躍するファシズム体制ということで現れてきます。そして、ファシズムの下での最高のテロリズムとしての戦争遂行ということに至ります。

(3) 覇権的・拡張的政治

(2) は内側に向けた政治ですが、対外的には覇権主義や拡張的政治に至ります。これは「(4) イデオロギー的民衆操作」のイデオロギーと結びついて、覇権的・拡張的政治となって現れます。ここで、押さえておくことがあります。ファシズムのひとつの型であるボナパルティズムにおいては、むしろ体制の維持ということが優先され、拡張的なことは出てこないということもあります。これがボナパルティズムの特徴とも言えることです。

(4) イデオロギー的民衆操作

ハ 民衆操作するイデオロギーの突き出し

これはナチスの第三帝国やアーリア人種による世界支配、日本の大東亜共栄圏などのイデオロギッシュなところで突き出しがファシズムの大きなモーメントになっています。

ニ 全体主義的思想の形成

最初に「全体主義」と「ファシズム」という用語から、これまでの議論も参照にわたしの規定をしておきます。「全体主義」とは、文字通り、全体の利害に個人の利害を従属させる、個々のいのちや生活ということのないがしろにし、全体的な利害を優先させると言うことです。それは往々にして共同幻想的な利害なのです。かつて「全体主義≡ファシズム」という規定をしましたが、これは「全体主義」という概念が「ファシズム」という概念よりも緩やかで、「全体主義」という概念が「ファシズム」という概念を包含するという意味です。ファシズム度、ファシズムの強弱と言うことではむしろ「ファシズム」の方が「全体主義」よりも容量が大きくなります。そういう意味では「ファシズム≡全体主義」となります。

ホ カリスマ性・象徴性による個人崇拜

これは必ずしもファシズムの必要モーメントになるかどうか、むしろひとつの体制として象徴的に吸引力を発揮するということがありえるのですが、往々にして個人崇拜的など

ころでファシズムが起動していくことがあります。ただこれも、個人の専制的な力として発動していくのか、それとも単に象徴的にまつりあげられているのかいくのかという違いは出てくるのだと思います。これは日本の天皇制ファシズムのことを念頭に入れたところでの分析です。

へ ポピュリズム政治

ファシズムの初期の過程、胎動過程でのポピュリズムということを押さえておく必要があります。ポピュリズムはファシズムのうそとごかしの政治と連動しているのです。「うそつきはファシズムの始まり」という提言が成り立つのです。

(5) 差別（排外）主義

民主主義社会では差別ということは否定的にとらえられます。ファシズムの本格的始動には、この差別主義が現れるかどうか指標になります。逆にいうと、反差別ということがファシズムへの対峙に肝要なこととなります。

II ファシズム度数（指数）

わたしは、今まで根源的にとらえ返す作業と論理整合性を追い求め、分かりやすい文を書けないうでいました。わたしの理論化の作業は、基礎理論的学習といえども、あくまで実践に開いた作業です。先人の陥った姿があります。先人の話をすると、自分の理論的な活動の脆弱さに赤面せざるをえないのですが、それでも敢えて書き続けると、例えば、後年マルクスの思想・理論の解説的なことを担ったエンゲルスが、分かりやすさを求めて、図式化の作業を「弁証法は対話の道筋」というところを踏み外して、「法則としての弁証法」という、絶対精神の自己展開としての外化なり疎外としての法則というヘーゲル弁証法に先祖返りしてしまった陥穽があります。そういう中で、解説者のはずが、晩期マルクスとの乖離に陥っていきました。これは、物象化という概念からとらえ返すと、図式化が物象化との接近性の問題としても押さええます。

そんな思いを持ちながらも、ファシズムの押さえがきちんとなされないことからする、状況把握がなされてこなかったという歴史をとらえ返し、ここでは、ファシズムをとらえ返すひとつの試論として、ファシズム度数（指標）というものを出示してみます。

I で書いているように、これをさらに掘り下げて内容的に項目をあげ、それを度数（指数）していく作業もあるのですが、ここは試論なので、それ以上掘り下げません。下位項目があるところは、そこに度数（指数）を示します。

各項目のファシズム規定における重要度の違いということのもっと掘り下げた分析が必要ですし、項目自体がダブっている側面もあるのですが、ここはざっくりと押さえる作業をしている試論ということで、詰めをなしえないままに提起します。

プロクルステスのベッド的になっているのですが、合わせて 100 にして、パーセンテージで表示できるようにしました。

(1) ナショナリズム（国家主義&民族主義）20

(2) 圧政政治

イ 情報統制・情報操作 10

ロ 情報機関の暗躍とテロリズム 10

(3) 覇権的・拡張的政治 10

(4) イデオロギー的民衆操作

- ハ 民衆操作するイデオロギーの突き出し 10
- ニ 全体主義的思想の形成 10
- ホ カリスマ性・象徴性による個人崇拜 5
- ヘ ポピュリズム政治 5

(5) 差別（排外）主義 20

III 歴史的現実的に存在したファシズム・ファシズム的なことの中身

IIで示した度数で具体的事例で度数（指数）を示す作業が必要なのですが、それ以前にその具体的中身を示してみます。わたしのとらえ返しなので、いろいろ異論が出るとは思いますが。各自でやってみてください。具体的指数表示は、もっと推敲が必要になるのでここでは省略します。

(1) 歴史上の個人や集団、国家の名によるファシズム

他にいくつも取り上げなくてはならないこと、例えばイタリア・ムッソリーニ、スペイン・フランコなども思いつくのですが、きちんと対象化できていないこともあり、取り上げることからいくつか取り上げてみます。

イ ナチズム

これまでのファシズムのもっとも典型的なファシズムではないかと押さえています。ファシズムのすべてのモーメントが網羅されています。

ロ 戦前戦中の日本型ファシズム

これをファシズムと規定するか異論を唱えるひとがいます。それは、天皇が飾りの、軍部の独走という形でファシズムが形成されていった過程があるからですが、むしろ天皇制という内に国家神統というカルト宗教をもつイデオロギー的なところでの突出したファシズムとして押さええます。

ハ アベノ政治

「戦争ができる国づくり」と情報隠蔽・操作・弾圧の法律を成立させていったファシズム的政治をやっていました。「アベ政治を許さない」という標語が作られたのですが、アベ政治は、自民党の保守部分や財界の支持をえるところで、ファシズム的一辺倒でなかったの、わたしはアベ政治のファシズム的部分を「アベノ政治」と名付けて批判してきました。

ニ 石原慎太郎元東京都知事

わたしは戦後日本における最も著名なファシスト政治家は石原慎太郎元東京都知事だと思っています。数々のすべてのジャンルでの差別発言の繰り返し、そして紛争の火種になると日中平和条約締結時に棚上げされた尖閣諸島問題に再浮上させたのは、石原元東京都知事でした。なぜ、何期も都知事を続き得たのか、まさに「強力な指導性」と国家主義や民衆の差別的感情に依拠するポピュリズムで民衆の支持を作り出していたのです。まさにファシズムのおそろしさなのです。

ホ 維新の会

地方自治というところで大阪から運動を起し、後に前項の石原元東京都知事を持ち上げ、一時一緒に動いていました。ただ、大阪発と東京発のファシズム的運動の違いは、大阪の維新の、一票でも多く票を得た者が勝ちという、およそ、民主主義の理念を振り曲げ

た、権力・強者の論理をふりまわすポピュリズム政治ということにあります。維新の始まりは、フクシマ原発事故直後の脱原発、行政構造改革、地方分権ということにありました。すでに脱原発は捨てたようです。地方分権は大阪都構想という集権化構想で、まがい物の性格を露呈しています。票を多く取るという意味でのポピュリズムにおいて、ベーシックインカムなどという福祉的なことを突き出しているのですが、そもそもベーシックインカムの規定をきちんとしないで、さらに中身を検討すると福祉の切り捨てのためのごまかしの政策でしかないことが明らかになっています。また、情報公開をきちんとするというところで、長時間の記者会見をしていると称しているのですが、記者会見の場は、民衆との対話という意味で大切なのに、批判するマスコミをやっつけ主義的につるしあげるようなことをしているのは、およそ、情報公開という意味を、民主主義を理解していない集団・個人としか言いようがありません。票を多く取るというところでの政策や、いろいろなひとの寄せ集め党という性格からまだ抜け出せてもいないので、あいまい性を孕んでいるのですが、今、日本の議会に進出している政党で一番ファシズムに近い政党として批判していく必要があります。

へ プーチン・ロシアのファシズム

そもそもKGBという情報機関の出身者が大統領になるということ自体の恐ろしさがあります。プーチンは巨大なるロシアという二重の意味での共同幻想（国家という共同幻想に重ねる「巨大なロシア」ということの追い求め）、「戦争ではない軍事作戦だ」という詭弁を振り回し、国内の情報統制を進め、ウクライナ住民の恐怖心を煽る無差別攻撃にも出ています。個別差別事項での差別主義的なことはわたしはまだ押さええていませんが、そもそも戦争という、強者が弱者に自分たちの意志を押し付けるという最大の差別的行為をなしているのです、まさにファシズム規定しえることです。

(2) 個別政策・政治行動のファシズム

具体的な政策でファシズム性をとらえ返す作業もしていく必要があります。これはアベノ政治として特定秘密保護法、安全保障関連法（戦争法）案、共謀罪などの動きをファシズム的な動きとして押さえてきたのですが、すべての政治、コロナ感染症対策、そしてプーチンのウクライナ戦争、ミャンマーの軍事政権など、すべてのことにファシズム指数のようなことからの分析をしていく必要を感じています。それぞれかなりの文になるので、ここでは具体的な分析は別稿に委ねます。

まとめ

この論攷はプーチン政治のファシズム規定（註5）とか、アベノ政治や維新の会の政治をファシズム規定できるのかというところで、文にしておきたいと書いていることです。かなり図式化していて、とりあえず表に出しますが、後に封印してしまうことになるかもという思いを持ちながら、今の政治状況の恐ろしさからあえて書き綴ったことです。あくまで、自らが自ら考えていくことの参照にしてください。ここであげたファシズム度数（指数）で、ファシズム（そのもの）、ファシズム的、ファシズムの始動、ファシズムの芽、というような規定が出来てきます。具体的な展開は少しは書いてきていますが、また別の機会に文にします。

（註）

1 岸田政権はこれを「侵略」規定しています。実は安倍元首相が、かつての日本の侵略戦争を、歴史修正主義的にきちんと認めてこなかったことが、ここで問題になっているのです。マスコミもこの問題をきちんととらえ返す報道していません。過去の反省が日本の政治もマスコミ報道にもないのです。ただし、一点押さえておかねばならないことがあります。それは、「侵略」は軍事的侵攻を受けた側からすると紛れもなく「侵略」なのですが、侵攻した側からすると、決して掠奪や植民地支配を直接目的にしたものではなく、今回は、強国ロシアという幻想にとらわれたファシズム的侵攻なのです。

2 もうひとつ、ウクライナのナチ、民族主義から守るという話も出ています（「朝日新聞論座」22.3.30 清義明「ウクライナには「ネオナチ」という象がいる～プーチンの「非ナチ化」プロパガンダのなかの実像」参照）。ただ、これはそもそもウクライナのナチやナショナリズムに栄養を与えてたのはロシアの数々の他国への侵攻があったという側面もあることを捨象している発言です。差別の問題でよく例にだされる自分がさんざんめぐって、相手に傷を作り、その傷を示して、「このひとはケンカばいひとだ」と中傷する類いのことです。

3 これはわたしが特に認識論的に影響を受けた廣松渉さんの廣松物象化論において、実体主義批判の要素還元主義批判ということにおいて、「要素」とか「要因」という言葉を使わず、「モーメント」という言葉を使っています。

4 これは入れ子構造とか、錯分子構造とか、函数内函数構造とか言いえることです。これも廣松渉物象化論での実体主義批判というところでの関係論的な展開における概念での展開から出てきていることです。

5 プーチン・ロシアのウクライナ侵攻を岸田政権は「侵略戦争」と規定したのですが、確かにウクライナ側からすると「侵略」なのですが、過去の植民地支配のような意味での「侵略」ではなく、むしろプーチン・ロシアの巨大なロシアという国家主義の幻想にとらわれた「ファシズム戦争」だとわたしは押さえています。一方のゼレンスキーもナショナリズムの突き出しをしていますし、そもそもアメリカのイラク戦争の反省とか、日本のファシズム的な蠢動のなかで、過去の日本型ファシズムへの反省もない、どさくさにまぎれた、軍事的安全保障関係での増強、憲法改悪の動きなど、きちんとしたファシズム規定・批判が今、必要になっています。そのようなところでの今回の試論です。 (み)

（「反差別原論」への断章）(46) としても）

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆ 「反障害通信 118 号」アップ(22/4/18)
- ◆ 「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆ 「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆ 「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

読書メモ

今回はマルクスの歴史三部作と言われている3冊の本の読書メモに入ります。一応、三つとも読み上げているのですが、今回は紙面の関係で、その中で、二つだけ取り上げます。

何を今更マルクスなのかというひとも当然いるのですが、サルトルやデリダが「マルクスの思想は現代社会で乗り越え不可能な思想」と規定した内容は生きていると思っています。マルクスをくぐっていないひとの情况分析は、表層的分析にとどまり、深化をなしえていません。今回、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』でとりあげているボナパルティズム論、これはまだファシズムという概念自体が登場していなかった時代の「ファシズム論」なのです。ここから、今回巻頭言で取り上げているファシズム論との対話が出来るのです。現在社会でのファシズム論自体がきちんとなされていません。で、「ナチスとかヒトラーになぞらえて批判することは避けるべきだ」ということを、あの橋下徹元大阪府知事・元大阪市長が言っているのですが、そんなことを言っていると、ファシズム批判が出来なくなるのです。また、「レッテル貼りは止めるべきだ」という意見が出てくるのですが、「レッテル貼り」というのは、中味のない誹謗中傷のようなことで、だからこそ、きちんと、ファシズム規定をしていくことが必要になり、そのためにも、ボナパルティズムということを押さえる作業も必要になってくるのです。まさに、「マルクスへ帰れ」なのです。誤解のないように書いておきますが、わたしはマルクスの教条主義的な信奉の「マルクス主義」なるものを批判しています。きちんとマルクスの限界ということも押さえたところでの、マルクスの読み直しが今必要になっているのです。そういう意味でのマルクスの再読の作業に取り組んで行きます。

たわしの読書メモ・・ブログ 589

・マルクス／伊藤新一・北条元一訳『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』岩波文庫（岩波書店）1954

583 と 585 で、マルクスの学習と再読に入っています。この本は、アーレントの『全体主義の起源』三部作の最後の「全体主義」とマルクスのファシズム論を対比させるために、マルクスのボナパルティズム（ブルジョア独裁定立以前のファシズム、「後進国」ファシズム）論を押さえる作業です。『全体主義の起源』の読書メモで書いていたように、実は、『全体主義の起源』1巻目の「ユダヤ人問題」の後に、マルクスの「ユダヤ人問題によせて」を読み、そして、マルクスの歴史3部作の題材の歴史順であり、執筆順でもある『フランスの階級闘争』を読んでから、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』『フランスの内乱』と進む道があったのですが、アーレントの三部作をまとめて読もうと思い、そしてまだインパクトが残っている内にマルクスのファシズム論をと、この本を先に読みました。

以前読んだのは、1979年です。マルクス／エンゲルスの歴史物、階級闘争史の集中学習をする機会があって読んでいたのですが、基本的文献を押さえる作業としての学習でした。それなりに指針があったのですが、まだそんなに深化したところで読めていたわけではありません。この本文の冒頭の「歴史は繰り返される・・・」というところは、わたしが

文を書くときに何度か引用していました。また、最後のナポレオン像が引き倒されたというところは、この本を最初に読んだときは、「イラン革命」の真只中で、同じように銅像が引き倒されたという話があり、そのことからめて文を書きました。今から思うと、「イラン革命」は宗教的復古のクーデターで「革命」と押さえたことの誤りがあったのですが。

さて、話をこの本に戻します。まず、1948年に最初にプロレタリア階級の階級としての決起をなした階級闘争がありました。それがフランスだけでなく、ヨーロッパに波及したのですが、フランスの場合、正統（復古）王政とオルレアン王政が単純に王政復古として統一化されず、共和主義的に展開し、そこに純粋共和主義者、社会主義者、プロレタリアートとのせめぎ合いが起きます。そういう中でナポレオンの帝政の復活をもくろむ、ナポレオンの甥を自称するルイ・ボナパルトが登場してきます。「ルンペン・プロレタリアート」と規定されたかなりあやしげなひとたちの取り巻きの中で、この本のタイトルの『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』は、ナポレオン一世と同じように革命月「ブルューメル」と名付けられた月にその甥のルイ・ボナパルトがクーデターを起こしたことから、それが歴史が繰り返されるとしても、まさに二番煎じのあやふやな政治でしかなかったという事をマルクスは展開しています。

さて、この本の中で押さえるのは三つです。まず一つは、唯物史観的なとらえ返しです。現実の政治（経済）的な歴史に、エンゲルスとともに自らが定立した唯物史観的観点から、分析してみせています。これは『共産党宣言』のなかで書かれていた、「今日まであらゆる社会の歴史は、階級闘争の歴史である。」（岩波文庫版 38P）という階級闘争史観とでもいうべきこととして展開しています。

次に、これは『フランスの階級闘争』で突き出した「階級独裁」という概念を、ここでも出していることがあります。実は、独裁、専制、ファシズムという三つの概念がきちんと区別付けされず、あいまいに使われている現状が今もあります。マルクスがここで使っているのは「階級独裁」という概念で、支配階級が支配階級として定立し、支配を貫徹するという事を階級独裁として押さえているのです。それは民主主義的であっても、（階級）独裁と規定します。ですから、資本主義社会が資本主義社会として定立している社会においては、それをブルジョア（階級）独裁と押さええます。マルクスは、来るべき革命の中で、プロレタリア（階級）独裁の必要性を主張しました。これは、先進国型、すなわち資本主義が十分に発達し定立してブルジョア独裁がまがりなりにも定立したところでの革命で、そうでないところでは、プロレタリア階級独裁ということはなしえません。だから、ロシア革命は労農ソヴィエト独裁としてなそうとしたのです。結局、ソヴィエト独裁からプロレタリア独裁がロシア共産党の一党独裁になることによって、「社会主義革命」への道も踏み外してしまったのですが。

実は、この「階級独裁」概念は次のファシズム論との関係で逆規定されている側面があるのです。

三つ目は、ファシズムの問題をマルクスがこの本の中で押さえていることです。尤も一般的にファシズムというのは、ブルジョア階級独裁が定立したあとで、その階級独裁がプロレタリア階級の台頭の中でゆらいでいるけれど、まだプロレタリア独裁に至る力をもっていないときに、階級を超えた有産階級の突撃・独裁としてのファシズムの台頭なのです。

ここで、マルクスが描いているのはボナパルティズムとでもいうべき、封建的支配からブルジョア独裁に移行する過程で、ブルジョア階級の力がまだ支配階級として熟していないときに、有産階級の全体主義的突撃・支配としてのファシズム、今日的情況で言えば、「後進国」ファシズムとでもいうべきボナパルティズムなのです。

さて、この書は、マルクスの警句的美文が散りばめられていて、「歴史が繰り返される」というところで、現在の情況の分析と政権批判をするときに引用できる文があります。そのようなこととして、切り抜きメモを残して置きます。

マルクスの美文は、当時の情況を押さえていないと、分からないことがあるのですが、この本にはかなり詳しい註が付けられているので、読みやすい本になっています。

最初目次を上げているのですが、この本の章にはタイトルがついていません。ですから、文の中に織り込むようにして、メモに入ります。(旧字体は新字体に変更しています)

はしがき 訳者

第二版への序文 マルクス 一八六九年

「私の本のむすびの句は「しかしやがて皇帝マントがルイ・ボナパルトの型におちかかるときには、ナポレオンの銅像はヴァンドーム柱のてっぺんからころげおちるだろう」となっているが、この〔予言〕はすでに実現された。」 8-9P

第三版序文 [一八八五年エンゲルス]

「しかしこれには、なおもう一つの事情があった。歴史の運動の大法則をはじめて発見したのは、まさにマルクスであった。この法則によれば、あらゆる歴史上の闘争は、たとえ政治上であれ、宗教上哲学上であれ、あるいはその他のイデオロギー上であれ、何れの領域でおころうとも、じっさいは社会諸階級の闘争の多少ともはっきりした現われにすぎない。そしてさらにこれらの諸階級の存在、したがってまた諸階級の衝突がどのようなものになるかをきめるのは諸階級の経済状態の発展程度であり、諸階級の生産の様式およびこれに制約された交換の様式なのである。」 11-2P・・・唯物史観

第一章

「ヘーゲルはどこかでのべている、すべての世界史的な大事件や大人物はいわば二度あらわれるものだ、と。一度目は悲劇として二度目は茶番（「ファルス」のルビ）として、と、かれは、つけくわえるのをわすれたのだ。ダントンのかわりにコーシディエール、ロベスピエールのかわりにルイ・ブラン、一七九三年から一七九五年までの山岳党（「モンターニュ」のルビ）のかわりに一八四八年から一八五一年までの山岳党（「モンターニュ」のルビ）、叔父のかわりに甥。そして「ブリュメール十八日」の再版が出される情勢のもとでこれとおなじ漫画が〔えがかれる〕！」 17P

「人間は自分じしんの歴史をつくる。だが、思う儘にはではない。自分でえらんだ環境のもとではなくて、すぐ目の前にある、あたえられ、持越されてきた環境のもとで作るのである。」 17P・・・唯物史観

「あらゆる階級と党派は六月事件のあいだに秩序の党に結集して、無秩序（「アナルヒー」のルビ）の党、社会主義および共産主義の党としてのプロレタリアートに対抗した。かれらは「社会の敵」にたいして「社会」を救ったのだった。かれらは旧社会の標語「財産、家族、宗教、秩序」を合い言葉として自分の軍隊のあいだにひろめ、反革命の十字軍にむ

かってよびかけた「このしるしのもとに汝は勝たん」と。」 29-30P

第二章

「六月事件いらいの憲法制定国民議会の歴史は、共和主義的なブルジョア分派の支配と解体の歴史である。共和主義的ブルジョア分派といったが、三色旗共和主義者、純粹共和主義者、政治的共和主義者、形式主義的共和主義者などの名でいられている分派のことである。」 31P

ブルジョア政党の基礎はフランス民族主義 31P

「かくされた帝国主義」——広義の「帝国主義」 32P

「ひさしいまえから自分こそ七月王制の政党の後継者だと思っていた共和主義的ブルジョア分派は、このようにして、自分の理想以上の成功を見た。が、しかし、かれらが支配権にたっしたのはルイ・フィリップの治世で夢見ていたような王冠にたいするブルジョアジーの自由主義的反乱によってではなく、資本にたいするプロレタリアートの蜂起が鉄砲だまで鎮圧されたことによってであった。かれらがもっとも革命的な事件として思いえがいていたことは、実際におこってみるともっとも反革命的な事件であった。果実は、かれらのふところにおちた、だが、知恵の木からであって、生命の木からではなかった。」 33P——「知恵の木」「生命の木」の註は 183P

「しかし、どれにもいつもながら但書きがついていて、自由が無制限なのは、「他のものの同一の権利ならびに公共の安全」によって、もしくは、まさにこの点の調和をはかるべき「法律」によって制限されるのではないかぎり、とされている。」 34P

「そこではかのすべての自由は、ブルジョアジーがこれらの自由を享受するにさいし他の階級の同一の権利のためにじゃまされない、というように調整されていた。」 35P

「「公共の安全」(つまりブルジョアジーの安全)」 35P

「このように用意周到なやり方でこの憲法は不死身にされていたが、それでもアキレウスのように、一つの点できずつけることができた。ただし、かかとではなく、頭で、いや二つの頭で、すなわちこの憲法がまよいこんだ立法議会という頭と大統領という頭で。」 35P

カヴェニャックのパリの戒厳状態の中での憲法制定作業——結局軍事支配 39P

第三章

「ブルボン家のもとでは大土地所有が自分の坊主と従僕とともに支配していた。オルレアン家のもとでは大金融、大産業、大商業、つまり資本が、弁護士、教授、能弁家を引きつけて支配していた。」 53P・・・ブルジョアジー支配階級の利害の分裂からする旧勢力との結びつき、上部構造・イデオロギーよりも利害、唯物史観的とらえ返し

「それぞれのがわがわが相手に対抗して自分の王家の王政復古をなしとげようとした場合には、それはブルジョアジーを二分している二大利害集団——土地所有と資本——がそれぞれ自分の主権と相手の従属を復活させようところみた、ということにほかならなかった。われわれはブルジョアジーの二つの利害集団というが、そのわけは大土地所有がその封建的な厚化粧と血統の誇りにかかわらず現代社会の発展によって完全にブルジョア化してしまっただからである。」 54P・・・秩序の党としての統一

「連合した王党諸派は、・・・・・・しかし、公の舞台、つまり彼らの国事劇のなかでは、議会の大政党として、自分の尊敬する王家を単に敬意を表すことでかたづけ、王政復古を

無制限に (in infinitum) 延期した。」 55P

「共和制はたしかにかれらの政治的支配を完成するが、同時にこの支配の社会的基礎をほりくずすものであることを、本能がかれらにおしえた。」 55-6P

「ところで連合王党は、自分らに対立する王位僭望者たるボナパルトと衝突するごとに、かれらの議会的全能が執行権力によっておびやかされたと思うごとに、それゆえに自分の支配の政治的称号を強調しなければならなくなるごとに、かれらはいつもきまって共和主義者としてたちあられ、王党派としてはあられわない。」 56P

小ブルと労働者の連合としての社会民主党。小ブルの議会代表としての山岳党、山岳党と社会主義者の連合 56-7P

「秩序党は国民議会がひらかれるとただちに山岳党を挑発した。いまやブルジョアジーは民主的小ブルジョアをかたづける必要をかんじた。ちょうど一年前革命的プロレタリアートの強みは街頭にあったが、小ブルジョアのつよみは国民議会それ自体ののなかにあった。したがってかんじんなことは時と機会がかれらの足場をかためないうちに、かれらを国民議会から街頭へさそいだし、われとわが手でおのれの議会的な努力を破壊させることであった。山岳党はまっしぐらにわなのなかにとびこんだ。」 58-9P

イタリア・ローマ砲撃が「誘いの餌」 59P

ボナパルトとその大臣の問責の否決から議会の解体 59P

「指導者はその民衆にたいして、逃げたという罪をかぶせたことで満足し、民衆はその指導者に、だましたという罪をおわせたことで、満足していた。」 60P

議会と街頭闘争の乖離 60-1P

「だが民主党は小ブルジョアを代表している。ところが小ブルジョアというものは過渡的階級であって、そこでは二つの階級の利害が同時ににぶくなるのである。だから民主派はおよそ階級対立というものを超越しているのだと思ひこむ。」 61-2P

「だが、六月十三日ブルジョアジーが議会の建物なかで自分の全能を確保したとき、かれらは、この議会のもっとも人気のある部分を追いだすことによって執行権力や民衆にたいして、いやしがたい弱みを議会そのものにせおいこませたのではなかったか。かれらは、多数の議員を検事局の引き渡し要求にむぞうさにゆだねたことによって、自分じしんの議会の不可侵性を廃棄した。」 64P

「かれらは (秩序党は)、立憲制度擁護の反乱に、無秩序な、社会転覆をめざす行為というやき印をおしたが、かれらはそのことによって、執行権力がかれらにたいして憲法を侵害しようとするような場合にはすぐに反乱をよびかけることを、自分じしんに禁じたのである。」 64P

「すなわち議会の休会を永久のものとし、共和国の看板たる自由、平等、友愛のかりに一点のあいましきもない言葉、歩兵、騎兵、砲兵！ をもってくるのが。」 68P

第四章

「いつもおなじ合言葉がくりかえされ、主旨はいつもおなじ、判決は、いつもちゃんとできあがっていて、いつもかわらずこうである「社会主義だ！」」 74-5P

「ブルジョア階級の支配が完全には組織されておらず、自己を純粹に政治的に表現するところまでゆかないかぎり、他の階級との対立もまた純粹にいらわれることができなかつた

し、またあらわれたところで、それが危険な方向転換をなして、国家権力にたいする攻撃をすべて資本にたいする攻撃に転化させてしまうことはありえなかったのである。」 76P

「だからブルジョアジーは以前「自由主義的」だと讃えたものをいま「社会主義的」だとそしることによって、つぎのことを白状しているのである。すなわち、かれらじしんの利害が、自分で統治することの危険からのがれよと命じていること、国内に静穏をとりもどすためには、まずかれらのブルジョア議会が静穏にされねばならず、かれらの社会的な力が無傷のまま維持されるためには、まずかれらの政治的な力が破壊されねばならないこと、個人としてのブルジョアは、自分の階級が他の階級とならんで平等に政治的ゼロの状態におとしめられるという条件のもとでのみ、他の階級を搾取しうるし、財産・家族・宗教・秩序を一〇〇%享受しつづけることができること、自分の財布をすくうために、王冠がかれらの頭からうちおとされ、かれらをまもるはずの剣が同時にダモクレスの剣のようにかれらの頭上につるさねばならないこと、を。」 77P

「これ以上低俗に大衆の低俗さをあてにして思惑をした王位僭望者はいまだかつていなかった。」 78P

第六章・・・クーデターへの道。経済状態からの政治状況の分析、唯物史観

「ブルジョア属」 113P・・・ というようなものの形成

「いったい秩序党は、すべての矛盾の解決をだれに期待していたのか。日めくりには、資源のなりゆきに、である。」 119P

「[沙漠] 駝鳥は[砂のなかに] 頭をかくして、それで的に見えないつもりになるというが、つまりかれらはそんな駝鳥議会をほったのである。」 123P

「・・・・・・このブルジョアが、合同、改正、延長、憲法、陰謀、同盟、亡命、主権横領、そして革命という何ともいいようのない騒々しい紛糾のなかで自分の議会共和国にむかって気ががい（ママ）のようにさけびたてたわけが、わかるだろう。——「終りのない恐怖より、恐怖のついた終りの方がましだ！」 129P——そのような情勢の中での、大統領の満期の一八五二年五月の第二日曜日という「終り」を睨んだボナパルトの決意

「クーデターはつねにボナパルトの固定観念であった。」 130P

「ブルジョア独裁」 136P

年代表・・・重要136-7P

第七章

「社会共和国は、二月革命の幕あきに、文句として予言としてあらわれた。それは一八四八年の六月事件に、パリ・プロレタリアートの血のなかで窒息させられたが、このドラマの以下につづく各幕を通じて幽霊となつてうろつく。民主共和国が名乗りでる。・・・・・・一八五一年十二月二日「共和国ばんざい！」という連合王党の悲鳴のうちに埋葬される。」

138P

「フランス・ブルジョアジーは、労働するプロレタリアートの支配をあくまでも阻止して、ルンペン・プロレタリアートを支配の座につけた」「かれらはサーベルを神に祭りあげた。」

138P

弾圧は自らの上に 139P

クーデターの性格 139-40P

「老いたるモグラ」 142P——註 212P

軍事的・官僚的統治機構 142P

「分業の増大」 142P

ボナパルトの下での国家の完全な自立 143P

「しかしそれでも国家権力は空中にうかんでいるのではない。ボナパルトは一階級を、フランス社会のもっとも数の多い階級、分割地農民 (Parzellenbauer) を代表している。」 144P

「したがって分割地農民の政治上の勢力は、ぎりぎりのところ、執行権力が社会をおのれに従属させるばあいにもっともよくあらわれるのである。」 145P

「それは農民の開化ではなく迷信を、卓見ではなく偏見を、未来ではなく過去を、減退のセヴァンヌではなく現代のヴァンデを代表する。」 146P——註 214P

「しかし十九世紀がすすむにつれて、封建領主のかわりに都市の高利貸が、土地についての封建義務のかわりに [土地] 抵当が、貴族階級の土地所有のかわりにブルジョアの資本があらわれた。」 149P・・・農民への支配者の変遷

「ナポレオン思想」 152P・・・二度目は茶番

「今となってはぬすみだけが財産を、偽善だけが宗教を、私通だけが家族を、無秩序だけが秩序を、すくいうるのだ！」「だから原因は生かしておかねばならないが、あらゆる結果はなくしてしまわねばならない。しかし原因と結果のちょっとしたとりちがえなしには、このことはおこなわれぬ。」「しかしボナパルトは自分を何よりも十二月十日会の大將、ルンペン・プロレタリアートの代表者としてこころえている。」 154P

不正と欺瞞 155P

「しかしやがて皇帝のマントがルイ・ボナパルトの肩におちかかるときには、ナポレオンの銅像はヴァンドーム柱のてっぺんからころげおちるであろう。」 158P——註 167P・・・結びのことば

解説

「・・・・・・・・ボナパルティズムのある意味での今日的形態でともいえるファシズム独裁の危険はけっして少なくはない。」 235P・・・ボナパルティズムとファシズムの関係

たわしの読書メモ・ブログ 590

・マルクス／中原稔生訳『フランスにおける階級闘争』国民文庫（大月書店）1960

前の読書メモでとりあげた『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』と『フランスの内乱』とともに、マルクスの歴史三部作としてマルクスの学習の基本文献になっています。読む順番は、内容的にも歴史順から言っても、この本が真っ先に来ます。再読にあたって、ファシズム論の学習の続きとして『ルイ・ボナパルト・・・・・・・・』を先に読んでしまいました。で、そこでこの本より先の歴史まで書かれているので、この本はより精細な階級闘争史にはなっていないのですが、「後進国」ファシズムとでもいえるべきボナパルティズムは出てこないのです。ただ、この本は、唯物史観（「史的唯物論」）の詳しい初めてとでもいえる、特定の階級に基盤をもった政治党派の階級闘争史とでもいえることを展開しています。

また、「階級独裁」という概念をこの本では出しています。そもそも「独裁」というと、「独裁者」と言う言葉で、個人的な専制政治支配と混同してとらえがちです。専制政治が一つの体制的独断圧政的政治の、個人の力が突出状態で「独裁者」という言葉が出て来ているのですが、マルクスの独裁は、あくまで階級独裁です。これは、資本主義社会が成立して以降、そしてブルジョア革命が成立して以降は、ブルジョア階級とプロレタリア階級との二大階級決戦という図式で進むとして、ブルジョア支配の安定的支配がある時期を「ブルジョア独裁」と規定するのです。それを覆るのは、プロレタリア階級独裁と規定しています。ただし、現実的に事態は、先進国革命の二大階級の階級決戦というようには進まず、プロレタリア階級独裁は定立し得ず、せいぜい労農独裁という形でしか進みませんでした（そもそも、労農独裁にしても、農は階層で、貧農や小作農はプロレタリア階級に属したのかもしれませんが、層と階級ではないので、労農独裁は「労農階級独裁」ではないのです）。そこから、プロレタリア階級独裁という形に進んだのではなく、結局外部注入論的インテリゲンチヤという小ブル的党による一党独裁にしかありませんでした。では、資本主義社会がさらに進んだ、帝国主義の時代にはプロレタリア階級独裁の革命は起こりうるのでしょうか？ 実はマルクス／エンゲルスの時代はまだ帝国主義が十分に進んでいず、「帝国主義論」の押さえが充分ではありませんでした。「帝国主義」——植民地支配の時代に「労働貴族」と呼ばれるような状態、被植民地の勤労者と帝国主義本国の労働者との格差がひろがった時代、そこにおける差別の重層化ということを押さええていく必要が出てきました。そして今日ポストコロナリズムという〈帝国〉的グローバリゼーションの時代になると、被抑圧者をさすことばが、「マルチチュード」や「サバルタン」という概念が出てきています。そもそもマルクスの時代に差別の問題がきちんととらえられていなかったのです。そして、ローザ・ルクセンブルクの継続的本源的蓄積論をとらえ返していくときに、差別ということが資本主義の維持のために必要になってきていると押さええます。逆に言うと、被抑圧者の解放のためには、反差別ということ突き出していくことが必要になります。もちろん、被抑圧者の唯一の多数派（註1）の労働者階級ということの押さえは必要ですし、資本主義の根本矛盾としての生産手段の私的所有（生産手段の所有からの排除）と「労働力の価値」（註2）を巡る差別、そして差別がそこへ収斂していくという問題で、プロレタリア階級問題が重要であり、その決起が不可欠になります。そのようなところで、資本主義を止揚する革命の主体は労働者階級と被差別者、「労・反差別」闘争となります。そこで、ここに「階級独裁」ということばがあてはまるのかと言えば、被差別概念はかならずしも階級概念ではないので、階級独裁という概念にはなりません。歴史的にもなかったし、これからもあり得ないのです。ブルジョア階級独裁については、ファシズムの「全有産階級の突撃」というところとの対照概念でできていて、今日には、小ブル諸党派や宗教的党との連立の模索が、そしてなによりも国家主義的なイデオロギー操作の中での階級支配となっています。

さて、この本に戻ります。この本が取り上げているのは、一八四八年二月のブルジョア革命からブルジョア階級とプロレタリアート最初の本格的衝突、そしてプロレタリアートの敗北した一八四八年六月革命をとりあげています。その後は、ルイ・ボナパルト大統領の任期が切れる一八五二年五月をにらんでブルジョア共和主義の仮面を被った秩序の党

(正統王制復古派、オルレアン派の合同)、純粹共和主義、小ブル共和主義、社会主義者などのいろんな動きが出ています。この本で書かれているのは一八五〇年三月一〇日補欠選挙まで。ここで、社会主義的な議員の当選があり、ブルジョア階級独裁がゆらいで、一八五〇年五月の普通選挙権の廃止に向かって動き、その後の争闘の中で、ルイ・ボナパルトの一八五一年一二月二日のクーデターに至ります。

この本の中で他にいくつか押さえておかねばならないのは、①エンゲルスの序文と②マルクスの恐慌革命論の展開、③「社会主義者」のこと、この本の中で書かれている「社会主義者」は、「空想的社会主義者」とマルクス／エンゲルスが批判していたひとたちや、アナーキスト「社会主義者」です。

①の序文は、訳者の注(一) 172-3Pに書かれているのですが、ローザ・ルクセンブルクも批判の文を書いていたように、ドイツ社会民主党の執行部がエンゲルスの序文を改竄し、「エンゲルスを議会主義的に歪曲した」としてエンゲルス自身も憤慨していたことです。ただし、わたしはそもそも当初マルクス／エンゲルスが描いた武装蜂起→プロレタリア階級独裁権力の樹立というところで、エンゲルスが「民主主義とは支配の一形態である」とまで展開していたところから、議会主義的なところに重心をいくらかなりとも、あるいはかなり移行したとまでは言えるとは思いますが。また、民衆の武器と国軍の武器の格差は、画段階的に広がっているという指摘もしています。しかし、このあたりはマルクス／エンゲルス亡き後の階級闘争の歴史をとらえるとき、右翼クーデターがかならず起きること、そしてもっと今日的にはファシストのテロリズムに備えていなければならないという問題で、武装の問題をおさえなければならないとことはあります。

②は、マルクスが「ユダヤ人問題によせて」で展開していた国家と市民社会の分離という政治と経済の分離ということが、今日国家の株価操作や金利・為替操作など強力に推進する、国家主義的な資本主義の時代になってきています。経済学者の中には「恐慌などものはや起きない」と断言するまで出てきているのですが。(註3)

③については、フランスにおいては、空想的社会主義者やアナーキスト社会主義者が優勢で、マルクスの共産主義理論はそれらとの理論闘争の中で、唯物史観的階級闘争史観を創出していったという歴史をおさえおかねはなりません。

全体の構成をおさえおくために、目次をあげておきます。

目次

序文 (エンゲルス)

一八四八——一八五〇年のフランスにおける階級闘争

- 一 一八四八年六月の敗北 一八四八年二月から六月まで
- 二 一八四九年六月一三日 一八四八年一六月から一八四九年六月一三日まで
- 三 一八四九年六月一三日の結果 一八四九年六月一三日から一八五〇年三月一〇日まで
- 四 一八五〇年の普通選挙権の廃止

注解

解説

人名注

切り抜きメモを残します。

序文 (エンゲルス)

「ここにあらたに刊行する著作は、マルクスが、彼の唯物論的な理解方法をもちいて、今日の歴史の一時期を、一定の経済的状态から説明しようとした最初の試みであった。……全ヨーロッパにとって危機的でもあり典型的なものでもあった発展をつうじて、その内的な因果関係を証明することであった。すなわち、著者の考えでは、政治上の事件を、つまりは経済的原因のはたらきに還元することであった。」3P・・・唯物史観、？エンゲルスの因果論

「すなわち、政治闘争を、経済的発達から生じた現存の社会階級および階級分派間の利害の闘争に還元すること、そして個々の政党が、これらの階級や階級分派の多かれ少なかれ適当な表現であることを証明すること、これである。」4P

「すなわち、一八四七年の世界的商業恐慌が、二月と三月の革命のほんとうの生みの親であったこと、そして一八四八年のなかばからだんだんと回復し、一八四九年と一八五〇年に全盛に達した産業の好況が、あらたに強化したヨーロッパの反動を活気づけた力であったということである。」5P・・・恐慌革命論 (註3)

一八四八——一八五〇年のフランスにおける階級闘争

「わずかに数章の例外はあるが、一八四八年から一八四九年までの革命年代記の比較的重要な各節はみな、革命の敗北! という表題をもっている。／これらの敗北においてたおれたものは、革命ではなかった。たおれたものは、まだ激しい階級対立をとるほどに先鋭化していなかった社会関係の結果である革命以前からの伝統的付属物——すなわち、二月革命までは革命党がふりすてることができないでいた、人物や幻想や観念や計画であった。そして革命党は、二月の勝利によってではなくて、一連の敗北によってのみ、それらのものから解放されたのである。」31P

一 一八四八年六月の敗北 一八四八年二月から六月まで

「ルイ・フィリップの治下でフランスを支配したものは、フランスのブルジョアジーではなくて、ただその一分派であった。すなわち、銀行家、取引所王、鉄道王、炭鉱、鉄鉱、森林の所有者、彼らと結ぶ一部の地主——いわゆる金融貴族であった。これが王座について、両院で法律を口授し、内閣からタバコ専売局にいたるまでの官職を授けた。／本来の産業ブルジョアジーは、公然の反政府派の一部をなしていた。」32P

「議会をつうじて支配し、立法していたブルジョアジーの分派にとっては、国家が負債に陥ることは、むしろ直接の利益になった。国庫の赤字、これこそまさに彼らの投機の対象であって、彼らの到富の主源泉であった。毎年度末の新しい赤字、四年か五年たつごとに新しい借款、そうして新しい借款のたびごとに、人工的に破産のせとぎわにおかれた国家から、金融貴族が詐取する新しい機会があたえられた。」33-4P

「七月王制は、フランスの国富をくいものにするための一株式会社にはかならなかった。」

35P

「……………二時間の期限がきれないうちに、はやくも、パリのすべての壁には、あの

歴史的な巨大なことばが輝いていた。／フランス共和国！ 自由、平等、友愛！」 40P

「当時すべての王党主義者は共和主義者にかわり、パリのすべての百万長者は労働者にかわった。この空想上の階級関係の廃止に相応していた常套文句が友愛、つまり全般的な親睦と同胞愛であった。階級対立のこのようにいい気持な抽象除去、矛盾する階級利害のこうしたセンチメンタルな調停和解、階級闘争からのこうした無双的な超越、すなわち友愛、これが二月革命の本来の合言葉であった。階級はたんなる誤解によって分裂したにすぎない。ラマルティエヌも、二月二四日、臨時政府を「異なった諸階級間に存在する、恐ろしい誤解をなくする政府」と名づけた。パリのプロレタリアートは、こうした肝要な友愛の陶酔にふけていた。」 45-6P

「公的信用と私的信用とは革命の強度を測定しうる経済上の寒暖計である。信用の目もりが下がるにつれて、それと同じ割合で革命の熱と想像力はたかまる。」 48P

「彼らの大部分はルンペン・プロレタリアートに属していた。それはすべての大都会で工業プロレタリアートと截然と区別される集団であり、泥棒やあらゆる種類の犯罪者の供給源となり、社会の落屑をひろって生活し、定職をもたない人間、浮浪者、宿なしの無籍者であって、その出身民族の文化程度によるちがいはあっても、そのラザローニ的性格をけっして捨てない連中である。」 52P・・・ルンペン・プロレタリアートとは今日の非正規雇用とかいう規定ではなく、いわゆる右派的な供給源になる「ごろつき」

「国民作業所」 54P・・・イギリスの救貧所と同様の欺瞞的政治

「三月一七日と四月一六日とは、ブルジョア共和制がその翼のもとに隠していた大階級闘争の最初の散兵戦であった。」 55P

「三月一七日は、プロレタリアートの、なんら決定的行動をとることのできない、あいまいな状態を暴露した。」 55P

「四月一六日は、臨時政府がブルジョアジーとともに、もくろんだ一つの誤解であった。」 56P

「五月四日には、直接普通選挙によって成立した国民議会がひらかれた。」 56P

「二月二五日からではなく、五月四日から共和制ははじまる」 57P

「既述で、われわれが見てきたことはつぎのことである。二月共和制は、ほんとうにブルジョア共和制以外のものではなかったし、またそうでしかありえなかったこと、しかし、臨時政府はプロレタリアートの直接の圧迫下によぎなくこれを社会的諸制度をもつ共和制と宣言したこと、パリのプロレタリアートはまた、ただ観念のなか、空想のなかでしかブルジョア共和制をのりこえることができなかったこと、また彼らが実際に行動をおこした場合にはいつでもブルジョア共和制に奉仕するような行動をしたこと、彼らにあたえられた約束が新共和制にとってたえがたい危険となったこと、臨時政府の全生涯がつまりはプロレタリアートの要求にたいする不断の闘争だと要約されたこと、以上である。」 58P

「社会主義的譲歩をとまなう二月共和制が成立するためには、プロレタリアートがブルジョアジーとともに王政に抗してたたかった一戦を必要としたように、こんどは、共和制を社会主義的譲歩から切り離すためには、つまり、ブルジョア共和制を公に支配的なものとしてうちだすためには、第二の一戦を必要とした。武器を手にとってブルジョアジーはプロレタリアートの要求を反駁しなければならなかった。そこで、ブルジョア共和制のほん

とうの出身地といえば、それは二月の勝利ではなく、六月の敗北である。」「五月一五日プロレタリアートは国民議会に突入し、彼らの革命的影響力をとりかえそうとして失敗し、いたずらにその精力的な指導者をブルジョアジーの獄吏にひきわたしたが、それによって彼らは、事の決着をはやめた。結末をつけねばならない！ この状態はおわらせなければならぬ！ こうした叫びによって、国民議会はプロレタリアートに決戦を強要する決意をもたらした。」 59P

「労働者はもう選択の余地はなかった。彼らは餓死するか、それとも戦端を開かないわけにはいかなかった。六月二二日に、彼らは巨大な反乱をもってこたえた。そこで、近代社会を分かち二階級間に最初の大戦闘がおこなわれた。それはブルジョア秩序の存続か壊滅かのたたかいであった。共和制をおおっていたヴェールはひきちぎられた。」 60P・・・ブルジョアジーとプロレタリアートの最初の本格的闘い

「そしてまた、いかにブルジョアジーが、耐えしのんできた死の恐怖の埋合わせに、前代未聞の残虐性を発揮し、三〇〇〇人以上の捕虜を大量処刑にしたかも、周知の事実である。」 60P

『新ライン新聞』一八四八年六月二九日のマルクスの文 61-2P・・・キーワードは「秩序」
「そして敗北によってはじめて彼らは、彼らの状態の些々たる改善でさえも、ブルジョア共和制の内部では一つのユートピアにすぎない、彼らがそれを実現しようとするれば、たちまち犯罪となるころのユートピアにすぎない、という事実を納得させられたのである。彼らが二月共和制に認めさせて獲得しようとした要求、その形式は大げさであるが内容は些末な、それ自身まだブルジョア的でもあった要求にかわって、あの大胆な革命的スローガンがあらわれた。すなわち、ブルジョアジーの転覆！ 労働者階級の独裁！／プロレタリアートは、自己の埋葬地をブルジョア共和制の生誕地とすることによって、ただちにブルジョア共和制が、その純粹の形態で、すなわち、資本の支配と労働の奴隷状態とを永久化することがその目的であるとはっきり認めるような国家として、あらわれざるをえないようにした。・・・・・・いまやすべての束縛から解きはなされたブルジョアジーは、すぐさまブルジョア・テロリズムに転化せざるをえなかった。プロレタリアートは一時舞台から退けられ、ブルジョア独裁が公然と認められたいま、ブルジョア社会の中間層、小ブルジョアジーと農民階級はその境遇がいよいよ耐えがたくなり、彼らとブルジョアジーの対立が激化するにつれて、ますますプロレタリアートの側に加わらざるをえなくなった。さきにプロレタリアートの台頭にこの悲惨の原因を見いだしたように、いまや彼らはその敗北に自己の悲惨の原因を見いださなければならなかった。」 62-3P・・・プロレタリア独裁とブルジョア独裁の概念の表出

「新しいフランスの革命は、ただちに民族的な地盤をすてて、ヨーロッパ的な地盤をたたかいとらざるをえない。そうした地盤のうえにのみ一九世紀の社会革命はなしとげることができる。／こうして、六月の敗北によってはじめて、フランスがヨーロッパ革命の先導権 [イニシアティブ] をとりうるころの全条件が作りだされたのである。六月反乱者の血にひたされてはじめて、三色旗はヨーロッパ革命の旗、——赤旗となった。／そこでわれわれは叫ぶ、革命は死んだ！ 革命万歳！」 64P・・・最後は反語

二 一八四九年六月一三日 一八四八年一六月から一八四九年六月一三日まで

「一八四八年二月二五日はフランスに共和制をさずけたが、六月二五日に革命をおしつけた。そして、革命は二月以前には国家形態の変革を意味したのであったが、六月以後にはブルジョア社会の転覆を意味した。」 65P

「労働者の革命的権力が粉砕されるとともに、民主主義的共和派、すなわち、執行委員会ではルドリュ・ロランによって代表され、憲法制定国民議会では山岳党によって代表され、新聞では『レフォルム』によって代表されていた小ブルジョアジーの意味の共和派の政治的影響力も粉砕された。彼らは四月一六日にはブルジョア共和派と協力してプロレタリアートにたいして陰謀を企て、六月事件ではまたそれと協力してプロレタリアートを撃破した。こうして彼らは、みずから自己の背景を粉砕した。」 65P

「だから、結局死んだのでもなく殺されたのでもなく、腐ってしまった、この憲法制定議会の生涯と実績において実現されたものは、勤王主義ではなく、ブルジョア共和主義だったのである。」 67P

「一二月二〇日には、立憲ブルジョア共和制の半分だけ、すなわち大統領だけが存在していたが、五月二九日には、それは他の半分によって、つまり立憲議会によって補足された。一八四八年六月には、[憲法により]自分を制定しつつあったブルジョア共和制が、プロレタリアートの言語に絶した戦闘によって、一八四九年六月には制定されたブルジョア共和制が、小ブルジョアジーあいてのなんとも名づけようのない喜劇によって、それぞれ歴史の出生簿にその名をきざみこんだ。一八四九年六月は一八四八年六月にたいするメネシス [復讐の女神] であった。一八四九年六月は、労働者が打ち破られたのではなく、労働者と革命の中間に立っていた小ブルジョアジーが倒されたのである。」 105-6P

三 一八四九年六月一三日の結果 一八四九年六月一三日から一八五〇年三月一〇日まで

「一八四八年六月二二日が革命的プロレタリアートの反乱であったとすれば、一八四九年六月一三日は民主主義的小ブルジョアの反乱であった。この二つの反乱はおのおの、それをおこなった階級を、典型的に純粹に表現していた。／ただリオンだけは、頑強な血みどろな衝突になった。．．．．．その他の地方で六月一三日の雷が落ちたところでは、燃えあがるまでにはならなかった。それは冷たい電光におわった。」 114P

「六月一三日は、小ブルジョアジーの抵抗をうちくだき、連合王党派の立法的独裁を既成の事実とする。この瞬間から国民議会は秩序党の公安委員会にすぎない。」 115P

「イギリスでは——そして、フランスの最大の工場主も彼らのイギリスの競争者に比べると小ブルジョアにすぎないが——たとえば コブデンとかブライトなどのような、銀行や取引所貴族にたいする十字軍の先頭にたった工場主がほんとうにいる。そうした工場主がなぜフランスにはいないのか？ イギリスでは工業が重きをなし、フランスでは農業が優勢であるからだ。」 127P

フランスの農民の革命化 133-7P

「立憲共和制、それは連合せる農民搾取者の独裁であり、社会民主主義的共和制、すなわち赤色共和制は、農民の同盟者の独裁である。しかも、秤は農民が投票箱に投じる票しだいで、上がったり下がったりするのである。農民は、みずから自己の運命を決定しなければならぬ。．．．．．革命は歴史の機関車である。」 136P

「そこで彼らは既存の社会主義思想体系の、すなわち空想的社会主義の、折衷学者ないしは精通者となるのだ。が、この空想的社会主義は、プロレタリアートがまだ自由な歴史的自己運動をするほどに発達していなかったあいだだけ、プロレタリアの理論的表現であったのである。」 142P

「そして、この空想的社会主義がプロレタリアートから小ブルジョアジーに譲り渡されており、そしてまた、いろいろの社会主義の領袖相互間の闘争によっていわゆる社会主義思想体系なるもののいずれもが、社会変革の一過渡点に対抗して他の一過渡点を不当に固執するものにすぎないということが、明らかにされているとき、プロレタリアートは、ますます、革命的社會主義のまわりに結集している。すなわち、ブルジョア自身が、それにたいしてブランキなる名称を考えだした共産主義の周囲に結集しつつある。この革命的社会主義の主張するところは、革命の永続の宣言であり、かつまた、階級の差別一般の廃止に、階級の差別の基礎となっている全生産関係の廃止に、これらの生産関係に照応するいっさいの社会関係の廃止に、およびそれらの社会関係から生じるすべての観念の変革に、達するための必然的な過渡期としてのプロレタリアの階級独裁である。」 143P・・・プロレタリア階級独裁、マルクスの永続革命論

「一八五〇年三月一〇日にはつぎの銘がしるされている。／わがあとに大洪水あらん!」

150P

四 一八五〇年の普通選挙権の廃止

「(全三章のつづきは『新ライン新聞』の最終号である第五、第六合併号の「評論」内にもっている。ここでは最初に、一八四七年イギリスにおこった大商業恐慌が述べられ、この恐慌のヨーロッパ大陸におよぼした反作用によって、大陸の政治的紛糾が尖鋭化されて、一八四八年二月と三月の革命になったことが説明され、ついで、一八四八年のうちにふたたびあらわれ、一八四九年にはさらに上昇した商工業の好況が、革命の高揚を麻痺させ、同時に反動の勝利を可能にしたのだということが述べられている。そのあとで、とくにフランスについて、述べられているのはつぎの文章である。)」 151P・・・恐慌革命論

「けれども、ここ三年間の歴史は、この住民階級（農民のこと）が、革命的な主導性を発揮する力がまったくないことを、十分に証明したのである。」 154P

「一方では、大陸の諸革命がイギリスにどれだけ反作用をおよぼすかという度合は、同時に、これらの革命がどの程度まで実際にブルジョア的生活関係を脅かしているか、またはその革命がどの程度までこの生活関係の政治的構成にしかふれないものであるかを示す寒暖計でもある。／このような、全般的好況の場合は、ブルジョア社会の生産力がおよそブルジョアの諸関係内で発達しうるかぎりの旺盛な発達をとげつつあるのだから、ほんとうの革命は問題にならない。そうした革命は、この二要因、つまり近代的生産力とブルジョア的生産形態が、たがいに矛盾に陥る時期にだけ、おこりうる。・・・・・・新しい革命は新しい恐慌についてのみおこりうる。しかしまた革命は恐慌が確実なように確実である。」

154-5P

普通選挙権を巡る闘いの敗北「パリに一五万人の軍隊がいたこと、決定を長らくひきのばしたこと、新聞による人心の慰撫、山岳党と新選出代議士の憶病、小ブルジョアの威厳ある平静、だがなによりも商工業の好景気が、プロレタリアートの側からのすべての革命

の試みを阻止したのである。」 158P

「選挙法は、新しい出版法という、もう一つの補足を必要とした。」 158P

解説

「七月王制は、ブルジョアジーのもっとも反動的・寄生的な一分派金融貴族の支配であった。二月革命は、この金融貴族の支配にたいする、その他すべての社会階級と階層の共同の革命としておこった。二月共和制はブルジョアジーの一分派のかわりに、全体としてのブルジョアジーの支配を完成したが、労働者を解放するものではなく、労働の奴隷制の永久化を目的とする連合ブルジョアジーの独裁であった。」 190P

「本書においては、史的唯物論の多くの基本的な緒命題が、具体的に説明され発展させられているが、とくに「プロレタリアートの階級独裁」という語が、はじめてはっきりとあらわれてくるのは本書においてである。なお、エンゲルスも序文で言っているように、労働者階級による「生産手段の取得」「賃労働の廃止」という科学的共産主義のはっきりとした表現も、本書ではじめてもちいられている。マルクス以前の偽社会主義やユートピア主義と截然と区別される点である。／が、とくに強調すべき点は、本書においてマルクスが、みごとな描写と多くの紙面をもちいて、詳細に中間階級、小ブルジョアと農民の状態およびその役割や、農民と労働者との関係を分析していることである。……かくしてマルクスはフランスにおける階級闘争の経験から、きわめて重要な理論的政治的結論である労農同盟の思想に達している。わが国でも、いまや農民の「声なき声」がもっとも重大な問題である。」 191-2P・・・マルクスがここで書いていることとこの解説とはかなりズレているのでは？ この解説が書かれたのは一九六〇年、現在の農業の占める位置が日本ではかなり低くなっていて、しかし、貶められているからこそ、単なる保守層でもなくなってきたのでは？ 差別の重層構造のなかで、プロレタリア階級のさまざまな階級・階層との連帯が必要になってきていることはあるのですが。

(註)

1 ほぼ、同数の関係としては、女性と男性の関係があります。ちなみに、差別をマイノリティ問題としてとらえる観点（差別のマイノリティ起因論）から、数的には同等かもしくは多数派なのに、力関係における大と小の対比を多数と少数とスライドしてとらえるような話が出ているのですが、これは、まさにプロクルステスのベッドのような、取り違えの話なのです。

2 「労働力の価値」ということは、「労働力」と「価値」という二重に物象化された概念です。ひとの生きる営みのなかで、「労働」ということに過大に焦点が当てられ、しかも、それがヒエラルヒー的に価値付けられるのは、まさに資本主義的生産様式のなかにおいてなのです。

3 今日的に、国家の株式市場や為替相場への介入の中で、恐慌がおきかないような政策が採られているのですが、それでも恐慌はおきかないとはいえないと、わたしは考えています。ただ、新自由主義的グローバリゼーションの進行の中で、真綿で首をしめるような民衆への搾取・収奪の中で、地下のマグマ的な矛盾のエネルギーが蓄積されているのではと思います。さらに、恐慌革命論は、武装蜂起型の革命論で、それだけが革命の選択肢なの

かという問題もあります。

(編集後記)

◆今回は、強引に（読書メモの一部を次回に回して）少なめにしました。「継続は力なり」で、定期刊行態勢を維持しています。力になっているかどうかは危ういのですが。

◆巻頭言は、「そもそも」シリーズで、「ファシズム」をとりあげました。前回の巻頭言と編集後記の「プーチン・ファシズム」規定を論理的に裏づける試みです。もう一つ、日本におけるファシズム的な動きを押さえ批判していくための裏づけ作業でもあります。

◆「読書メモ」は、マルクスの歴史三部作に入りました。これは、「社会は変わらない」という言説が広まるなかで、社会を変えようとした運動の背景にあったマルクス理論の検証作業を通じた、これまでの運動の総括、理論的な整理のなかで、「社会は変え得る」ということを宣揚し、運動を再形成していく作業の一環なのです。

◆「映像鑑賞メモ」「インターネットへの投稿から」は、お休みです。

◆「コロナウィルス感染症対策の論点整理」というシリーズで、専門的知識もないままに、「論理的整理」ということで文を書いてきたのですが、PCR検査を増やす・増やす、とずっと言っていて、結局増やさないままです。そもそも、いろいろ医療態勢の不備が指摘されているのに、公立病院の独立法人化などを推進し、結局福祉・医療の切り捨て路線を堅持しているのですから、「何をか言わん」の政治なのです。結局、「やっている振り」の右往左往政治に収束しています。選挙対策のパフォーマンスというポピュリズム政治に終始しているのです。

◆プーチン・ロシアの「フェイク」というフェイクの主張が出てきています。認識論の世界では「絶対的真理」など措定できないので、嘘か真実か分からないという論理がまかり通ると思っているのでしょうか、嘘が嘘とはっきり分かるときがあります。たとえば、ロシアのウクライナ侵攻以前に、ベルラーシ軍とロシア軍のウクライナ国境付近での軍事演習が行われ、ウクライナ侵攻があるのではないかというニュースが流れているときに、B S T B S「報道 1930」に出演した駐日ロシア大使が、「ウクライナ侵攻というのは、フェイクだ」と言っていました。それから半月もしない間に、侵攻が始まったのです。おそらく、大使館レベルまで知らされていなかった、というより、そもそもプーチンが独断的に始めた戦争なのです。それで、「侵攻や侵略ではない、特別軍事作戦だ」とか今度は言い出す始末です。そして、ロシアのミサイルや砲撃での民間施設への被害も、そのような事実はないとか、ウクライナの自作自演だとか言い出す始末です。「ウエイクだ」ということがますますウエイクだと思われるということに気付いていないのでしょうか？

駐日ロシア大使は、T B S「報道特集」の金平キャスターのインタビューで、事実確認を迫ることに対し、「見解の相違」などという発言でごまかそうとしていたのです。事実を事実としていかにとらえるのかに、「見解の相違」などないのです。そんなことをしていると、そもそもプーチンの「巨大なロシア」という思いでのウクライナ侵攻ということが、「巨大なフェイク大国・ロシア」と世界から批判されることになるのではないかと思えるのです。

誤解のないように書き置きますが、今回の戦争に対して、ウクライナ国旗を掲げての反

戦の運動に関しては、わたしは苦々しい思いを抱いています。ゼレンスキーウクライナ大統領の対応にも、わたしは批判的思いを抱いています。そのナショナリズムが、ウクライナ民衆の犠牲を生み出している責任があるのです。国家主義批判のなかで、ロシア民衆の反戦の闘いを軸にした、民衆レベルでの国際連帯が今問われているのです。

◆これからの予定を少し書いておきます。障害問題では、「障害関係論原論」を書き始めようとしています。本当は、「障害関係論総論」なのですが、そこまで書ける残る時間の余裕がないというところで、「原論」で、さらに、「原論」以前の「原論序説」になってしまう可能性が大きいのですが。もうひとつ、以前、「社会変革への道」の連載をしていたのですが、勉強不足を痛感し、学習に戻っていました。それを、一定煮詰め得たので再開しようと思っています。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされてきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論していきたいと考えていきます。

■連絡・アクセス先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>